

未婚者における結婚の条件とアイデンティティ発達 および個人主義的家族観の関連

永久 ひさ子*

結婚の条件を、結婚に障害があると考えられる程度からたずね、結婚の条件尺度を作成した。結婚の条件項目の因子分析の結果、関係性リスク回避、経済的リスク回避、自己成長不全リスク回避、両立困難リスク回避、行動制約リスク回避の5因子が抽出された。関係性リスク回避と経済的リスク回避は女性の方が有意に高く、自己成長不全リスクを除く4つの条件はいずれも、結婚イメージが楽観的な群において有意に低かった。また、結婚後も家族とは別の自分の目標を持ち続けることが重要という個人主義的家族観が高いほど、全ての結婚の条件が高かった。アイデンティティ発達が結婚イメージを媒介に結婚の条件に影響するという仮説モデルを作成し、共分散構造分析による検討を行ったところ、アイデンティティ発達が結婚イメージを媒介に経済的リスク回避と行動制約リスク回避条件に負の影響を与えるというモデルが支持された。ここから、成人期初期においてもアイデンティティ確立が未熟である場合、結婚のイメージが悲観的になり、結婚による経済的リスクと行動制約リスクを回避する条件が結婚の重要な条件となることを示した。

Key words : 結婚の条件, リスク回避, アイデンティティ発達, 結婚イメージ, 個人主義的家族観

問題と目的

未婚者における結婚相手の条件

急激な少子化は喫緊の社会問題である。婚外子が少ない日本においては(厚生労働省,2015),晩婚化・未婚化はその主要な要因となる。第15回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所,2016)によれば、結婚意思がある25歳以上の未婚者が未婚に留まる最大の理由は「適当な相手にめぐり合わない」であった。適当な相手の条件、すなわち結婚相手に望む条件は男女ともに「相手の人柄」「家事・育児能力」「自分の仕事への理解」などで、女性ではさらに「経済力」も重視している。結婚相手に求める条件には、性別や地域による違いがあり(内閣府,2014)、未婚者が結婚に

期待する価値と表裏一体と考えられる。

未婚化や晩婚化は、これまで経済学や社会学のテーマとして多くの研究がみられる。しかし、結婚が個人の選択によるものとなった今日、結婚は、その人がどのような生き方を望むのかという極めて心理学的テーマとなっている。これまで、結婚に対する期待や結婚への態度を測定する様々な尺度が作成されているが(例えば Braaten & Rosen,1998; S. S. Park & L. A. Rosen, 2013)、結婚の条件を測定する尺度は内外ともに見られない。

今日の日本の結婚は、かつての見合い結婚から恋愛結婚が主流になっている。しかしながら、恋愛結婚においても、恋愛感情や相互の好意のみによって結婚相手を選択されているわけではない。つまり、結婚に「適当な相手」とは、恋愛感情を

*人間学部心理学科

持てる相手で、かつ、結婚相手として受け入れられる条件が整備された相手であり、どちらかが欠けても適当な相手にはならない。1980年代末のバブル期には、女性の結婚の条件として「3高」が注目されたが、バブル崩壊後には、快適な生活ができる収入、価値観が同じ、家事をすすんでやってくれるという「3C」に変化している（小倉, 2003）。つまり、今日の未婚化・晩婚化の最たる要因である「適当な相手にめぐり会えない」について検討するには、結婚の条件として何を重視しているかを検討する必要がある、それは従来の結婚意欲や結婚態度の尺度によっては捉えることができない。そこで本研究では、結婚意思があっても適当な相手とめぐり会えないのはなぜかについて、結婚の条件を切り口とする心理学的研究を行う。

恋愛への態度とアイデンティティ発達および個人主義的態度の関連

恋愛結婚が主流となった今日、恋愛が自分の生活に何をもちたらすか考えるかについての期待や予期は、結婚の期待と密接に関連するであろう。高坂（2011）は、異性への関心が高まると考えられる青年期においても、恋愛に消極的な者があることを明らかにし、それが、個人主義的傾向及びアイデンティティ確立の未熟さと関連することを報告している。また高坂（2013）は恋愛関係が自分の生活に及ぼす影響の推測について、自己拡大・充足的気分・他者評価の上昇というポジティブな影響と、時間的制約・経済的負担・他者交流の制限・関係不安というネガティブな影響から成る尺度を作成し、アイデンティティが未熟な場合にネガティブな影響の予測が強まることを報告している。この報告からは、結婚生活についても同様の影響の予測がなされ、結婚の条件には個人主義的価値観や自我発達が関連するものと予測できる。

結婚の条件尺度項目の収集

恋愛の延長上にある結婚が、その後の人生にもたらす影響についても、恋愛関係の影響の因子と同様に、プラス・マイナス両方の影響を予測しているのではなかろうか。すなわち、結婚の条件に

は、プラスの影響の予測が実現されるための条件と、マイナスの影響を予測しそれを回避するための条件があると考えられる。結婚の影響にはさらに、経済的側面や家事・子育て役割、家族の問題なども加わるであろう。以上から、本研究の結婚の条件項目は、大学生における恋愛関係の影響尺度（高坂, 2013）のポジティブな影響とネガティブな影響の因子項目を参考に、それらの項目を結婚生活の影響となるよう修正した項目に、未婚者を対象に行った未婚に留まる理由についての面接調査から得た項目を追加して作成した。

結婚相手を自由に選べるのであれば、より多くの望ましい条件を満たす相手との結婚を望むのが当然であろう。このことから、結婚相手に望ましい条件をどれほど求めるかを問う設問では、個人差の検討が困難と思われる。一方、結婚生活に想定される苦勞は、それが自分にとって重要な事柄であるほど、結婚後に解決の努力をするよりも、その可能性の低い相手を選ぶ方がより合理的と考えるのではなかろうか。これらの理由から、本研究における結婚の条件は、望ましい条件の重要性を問うのではなく、望ましい条件の不足や結婚生活に不都合な条件が、どれほどその人の結婚の障害になるかを問うこととした。

家族に関する価値観の変化

近年の家族の価値観についてみると、女性の社会進出による夫婦の役割意識の変化と離婚率の上昇が進んでいる。第15回出生動向基本調査（国立社会保障・人口問題研究所, 2016）では、女性も男性と同程度に、自分の仕事への理解と家事能力を相手に期待していることが報告されている。この条件の背景には、これまでの家事や育児の分担の調査で、妻が有職の場合も含め、夫の家事・育児の分担の少なさが指摘されてきた（国立社会保障・人口問題研究所, 2016）ように、今も家庭内では性別役割分業が期待される負担感の予測があると考えられる。またこの負担感は、個人を家族に埋め込まれた存在と捉えるか、個人を家族と同等と捉えるか、という、個人主義的家族観とも関連すると考えられる。すなわち、結婚後も個人の人生目標を持ち続けたいと考える個人主義的

族観が強いほど、結婚による自分の生活や生き方の変更や、制約を負担に感じ、そのような相手との結婚を回避しようとするのではないかと考えられる。

そこで本研究では、個人主義的家族観として、結婚後の家事・子育て・稼得役割の分担についての考え方と、結婚後に家族とは別の個人目標を持つことへの態度、および、望ましくない結婚生活をやめる（離婚）選択への態度について問い、それらと結婚の条件の関連をみることにした。

結婚のイメージと結婚の条件

結婚には幸せというポジティブな側面と、大変さというネガティブな側面があるが、そのどちらが多いとイメージするかは、結婚の条件の厳しさに関連するのではないだろうか。谷口(2013)は、恋人を欲しいと思わない理由を尋ねた調査から、恋愛に対する不安はないものの恋愛を回避している恋愛回避型には恋愛のイメージが悪いという特徴があると報告している。

結婚生活においては、時間や経済などをどう配分するかについて、夫婦間の交渉が必要になる。多くの場合、一方が多くの配分を求めれば、相手は自分の配分が少なくなるため、その交渉は自己主張的に行う必要がある。一方、日本人は対人関係の円滑さや調和性がウェル・ビーイングに直結するため(Markus & Kitayama,1991)、調和的關係を重視すると自己主張が困難になる可能性がある。そのため、結婚を大変なことが多いとイメージする人ほど、結婚相手の条件に、そのような交渉をあまり必要としない相手を求めるのではないだろうか。

つまり、結婚意思があっても結婚イメージが悲観的である場合、その解決法として、結婚による自分の人生へのネガティブな影響を可能な限り回避できるような条件を重視するものと予測できる。

アイデンティティと結婚の条件

Erikson(1959/2011)によれば、青年期に個としてのアイデンティティが確立した後に、互いの個を尊重できる親密性の課題に向き合うことになる。しかしアイデンティティの課題が未達成の青

年は、自分のアイデンティティ形成に多くのエネルギーを要するため、他者にエネルギーを使う余裕がない(大野,2010)。また、互いにアイデンティティ形成が不十分な青年期の恋愛関係は、アイデンティティ形成のためのエネルギーをお互いに奪い合う関係になる(高坂,2016)。

これらの主張を踏まえれば、青年期にアイデンティティの確立が遅れ、成人期初期に至ってもアイデンティティ形成の途中にある場合には、成人期初期であっても自身のアイデンティティ形成に多くの時間や心身のエネルギー、経済といった個人的資源を必要とする。個人的資源は有限であるため、多くの個人的資源を他者に配分することを求められるような結婚は回避したいと考えるのではないだろうか。また、アイデンティティの未熟さは、自分の価値観に自信が持てない、相手の主張を受け入れられないなど、親密な関係性の構築における困難さを高める。そのため、結婚生活について、両者で必要な資源を奪い合う状態が想定され、結婚を幸せよりも大変なことのほうが多いとイメージさせるのではないだろうか。アイデンティティの未熟さが恋愛への消極性と関連していたように(高坂,2011)、アイデンティティの未熟さは、結婚についても悲観的結婚イメージを強め、その解決法としての結婚の条件を厳しくするものと予測される。

以上より本研究では、「適当な相手」とは、結婚による人生へのポジティブな影響の実現と、ネガティブな影響の縮小・回避のための条件を備えた相手と捉え、未婚者が重視する結婚の条件の構造を明らかにする。その上で、結婚の条件が個人主義的結婚観によって異なるか否か、また結婚イメージやアイデンティティ発達とどのように関連するかの検討を行うことを目的とする。

方法

調査時期および調査方法

2021年6月にインターネット調査会社であるアイブリッジ社を通して、web調査を実施した。対象者は、アイブリッジ社が保有するモニターであり、20歳から35歳の未婚者であることを条件

に200名から回答を収集した時点で回答を締め切った。この際、調査は匿名で行われ、協力は任意であり、答えたくない項目には回答しなくて良いこと、それによる不利益は生じないこと、回答によって調査会社より謝礼が出ることなどが画面上に表示され、それに同意した者が回答した。

調査対象者

回答者200名のうち、回答の信頼性の低い3名を除外し、197名を分析対象とした。内訳は女性118名、男性が79名である。年齢は20-25歳が73名、26-30歳が62名、31-35歳が62名とほぼ同じ割合である。回答者の職業で最も多いのは正規雇用で、女性は55名、男性は35名である。交際相手の有無では、女性は交際相手無しが65名、有りが51名であり、男性は交際相手無しが43名、有りが35名と、いずれも交際相手無しの方が多かった。結婚意欲では、できればしたい、是非ともしたいを合わせると、女性の65.5%、男性の54.6%は結婚意欲があるものの、結婚はしたくない、あまり結婚したくないという結婚意欲が低い者が女性は34.5%、男性は45.5%だった(Table1)。

Table1 回答者の属性（数値は人数）

年齢	20-25歳	26-30歳	31-35歳	合計
女性	48	35	35	118
男性	25	27	27	79
合計	73	62	62	197
職業	学生	非正規雇用	正規雇用	自営その他
女性	20	33	55	10
男性	9	18	35	17

	交際相手有り	交際相手無し
女性	51	65
男性	35	43

調査内容

(1) 結婚の条件項目

独自に作成した結婚の条件34項目について、「結婚相手として適当か否かを判断する際、次の事柄はどの程度結婚の障害となるか」という教示により、回答を4件法（1全く障害ではない～4かなり障害になる）で求めた。

(2) アイデンティティ尺度

アイデンティティ確立とアイデンティティの基礎各10項目の20項目（下山,1992）でたずねた。回答は、「次の項目はあなた自身にどのくらい当てはまりますか」という教示により、1当てはまらないから4当てはまるの4件法で回答を求めた。

(3) 個人主義的家族観

第15回出生動向基本調査で使用されている、結婚・家族に関する未婚者の意識項目から、結婚したら性格の不一致くらいで離婚すべきではない・結婚しても結婚相手や家族とは別の自分だけの目標を持つ方がよい・子どもが小さいうちは母親は仕事を持たず家にいるのが望ましい、について「次の項目はあなたの考えにどの程度当てはまりますか」という教示でたずね、1当てはまらないから4当てはまるまでの4件法で回答を求めた。

(4) 結婚イメージ

独自に結婚イメージをたずねる項目を作成した。「結婚には幸せなことも大変なこともあります。どちらの方が多いと思いますか。あなたの気持ちに当てはまる数字を選んでください。」という教示により、1大変なことの方がかなり多い～4幸せなことの方がかなり多い、の4件法で回答を求めた。

(5) 結婚意欲

「あなたは結婚したいですか？あなたの気持ちに最も当てはまる数字を選んでください」という教示により、1結婚はしたくない2あまり結婚したくない3できれば結婚したい4是非とも結婚したいから回答を求めた（Table2）。

Table2 結婚意欲

あなたは結婚したいですか？	女性		男性	
	人数	%	人数	%
結婚はしたくない	15	12.9	13	16.9
あまり結婚したくない	25	21.6	22	28.6
できれば結婚したい	41	35.3	26	33.8
是非とも結婚したい	35	30.2	16	20.8
合計	116	100	77	100

(6) フェイスシート

性別、年齢、職業、居住地域、年収、交際中の恋人の有無を尋ねた。

に同意した者のみが質問項目に進むように構成した。内容については大学の倫理審査にて承認を受けた。本研究の分析に用いた統計パッケージは、SPSS Statistics 25 および Amos 25 である。

倫理的配慮

回答を始めるにあたり、最初の画面で、回答は任意であり、答えたくない項目は飛ばして構わないこと、それによる不利益はないこと、内容は学術的目的以外には使用しないことを呈示し、それ

結果

結婚の条件の因子分析による構造の検討と得点化
結婚の条件の構造を検討するため、結婚の条件

Table3 結婚の条件項目の因子分析結果 (主因子法・Promax 回転後)

結婚の条件項目	F1	F2	F3	F4	F5
関係性リスク回避 $\alpha = .89$					
自分の気持ち (相手への愛情) に確信が持てない	.90	-.04	-.12	-.19	.19
結婚したいだけなのではないかと感じる (自分への愛情に確信が持てない)	.77	-.12	-.06	.02	.19
自分より相手の親に頼ろうとする	.69	.11	-.09	.04	-.02
ときめきを感じられない	.64	.05	.08	.07	-.11
浮気するのではないかと心配だ	.54	.07	.03	-.05	.06
子どもについての考え方が自分と違う	.52	.24	.05	.13	-.14
親が喜んでくれる相手ではない	.48	.19	-.02	.09	-.12
容姿が好みではない	.38	.19	.14	.10	-.12
経済的リスク回避 $\alpha = .88$					
相手の収入が安定してはいるが、かなり低収入である	.03	.92	-.04	-.19	.08
相手の収入が不安定である	.13	.85	-.04	-.04	-.11
結婚すると今の生活水準より下がる	-.09	.55	.21	.06	.16
お金についての考え方が違う	.14	.53	-.07	.17	.08
意見が違う時、だいたい相手の意見で決めてしまう	-.10	.52	.02	.09	.21
結婚すると、自分のためのお金が持てなくなる	.07	.42	-.04	.17	.24
自己成長不全リスク回避 $\alpha = .83$					
その人との結婚が新しい経験につながるわけではない	-.16	-.07	.90	-.02	.05
結婚しても自分の成長にはつながらない	.09	-.12	.73	.02	.09
お互いの仕事や趣味に関心がない	-.05	.22	.62	.00	-.06
頼りなく感じる	.35	.18	.48	-.11	-.03
両立困難リスク回避 $\alpha = .76$					
家事能力がない	-.13	.02	-.05	.90	-.07
転勤が多い	.18	-.04	.02	.58	-.10
結婚すると、仕事や趣味などやりたい事が十分にできなくなる	.13	.02	.03	.45	.27
結婚すると、自分の仕事を続けられなくなる	.30	-.26	.08	.38	.16
行動制約リスク回避 $\alpha = .64$					
結婚すると、それまでの異性友人との関係が保てなくなる	.10	.01	.14	-.13	.67
いつも一緒にいたがる	-.06	.31	-.07	.03	.51
	因子間相関	F2	F3	F4	F5
	F1	.69	.60	.69	.53
	F2		.60	.59	.46
	F3			.48	.46
	F4				.52

34項目について、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。いずれかの因子に.35以上の負荷がみられることと、因子の解釈が可能であることを基準に、因子分析を繰り返した結果、解釈可能な固有値1.0以上の5因子が得られた（Table3）。

第1因子に負荷の高い項目をみると、自分の気持ちに確信が持てない、結婚したいだけなのではないかと感じる、自分より相手の親に頼ろうとする、浮気するのではないかと心配だ、子どもについての考え方が自分とは違うなど、2人間の愛情への不安や、家族を形成していく際の障害となりそうな事柄など、将来の関係性の破綻に繋がるリスクを回避するための条件と解釈できるため、関係性リスク回避と命名した。第2因子に負荷の高い項目は、相手の収入が安定はしているがかなり低収入である、相手の収入が不安定である、結婚すると今の生活水準より下がる、お金についての考え方が違うなど、結婚後の経済的不満やそこから派生するトラブルのリスクを回避するための条件と解釈できることから、経済的リスク回避と命名した。第3因子に負荷の高い項目は、その人との結婚が新しい経験につながるわけではない、結婚しても自分の成長にはつながらないなど、結

婚が自己成長の機会にならないことを機会損失と捉え、そのリスクを回避するための条件と解釈できることから、自己成長不全リスク回避と命名した。第4因子に負荷の高い条件は、家事能力がない、転勤が多い、結婚すると仕事や趣味などやりたい事が十分にできなくなるなどであった。男女ともに、結婚後仕事を続けられるか否かは、相手の家事能力が重要な要因である。また、退職すると再度同じような条件で就職するのは容易ではないため、相手の転勤は自分の仕事の両立の可否を左右する重要な要因となる。これらのことから、仕事と家庭の両立が困難になるリスクを回避するための条件と解釈し、両立困難リスク回避と命名した。第5因子は、結婚するとそれまでの異性友人との関係が保てなくなる、いつも一緒にいたがる、の2項目であった。未婚者の性別に関わらず、活発な社会的活動をする上で、異性友人は有益な存在である。しかし結婚相手によっては、異性との友人関係が維持しにくくなる、休日に1人で外出しにくくなるなど、行動が制約される可能性もある。第5因子は、それを機会損失と捉え、そのリスクを回避するための条件と解釈できることから、行動制約リスク回避と命名した。

なお、除外された項目は、「神経質なところが

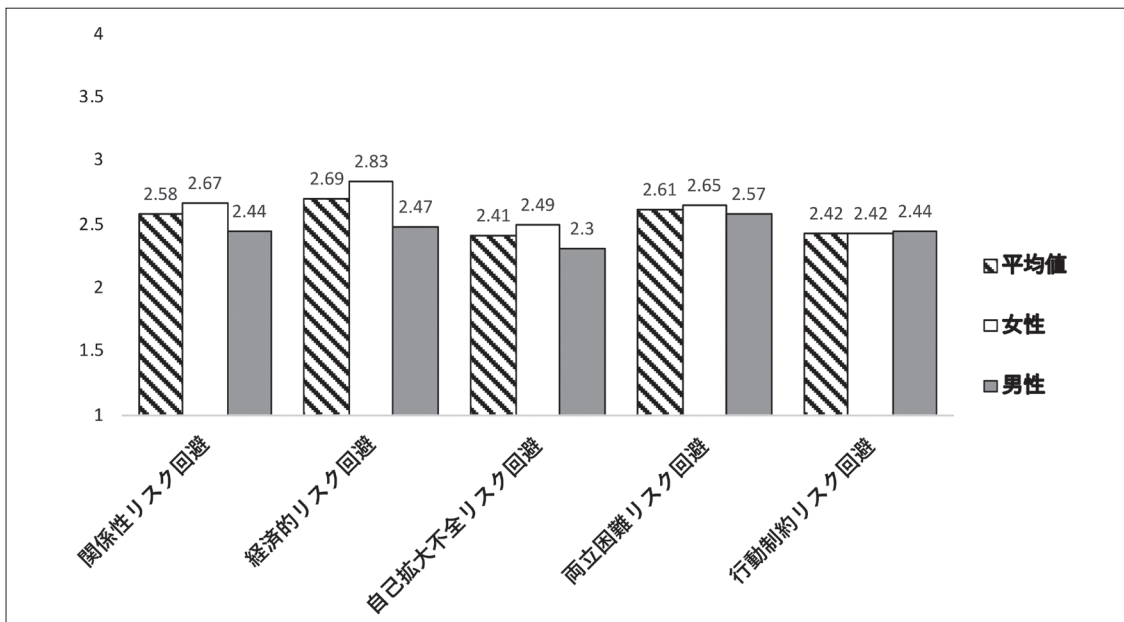


Figure1 結婚の条件 平均値と性差

Table4 個人主義的家族観と結婚の条件の相関

	結婚後も家族とは別の 目標を持つ事は大事だ	性格の不一致くらいで 離婚すべきではない	子どもが小さいうちは 母親は家にいるのが望ましい
関係性リスク回避	.20**	.03	.00
経済的リスク回避	.28***	.08	.06
自己成長不全リスク回避	.12	.09	.02
両立困難リスク回避	.23***	.14	.00
行動制約リスク回避	.16*	.09	-.03

注：値は相関係数 r * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table5 結婚イメージ

	大変なことが かなり多い	大変なことが やや多い	幸せなことが やや多い	幸せなことが かなり多い	合計
女性 (人数)	24	46	36	9	114
	21.10%	39.50%	31.60%	7.90%	100.00%
男性 (人数)	20	24	27	7	78
	25.60%	30.80%	34.60%	9.00%	100.00%
合計 (人数)	44	69	63	16	192
	22.90%	35.90%	32.80%	8.30%	100.00%

ある」, 「相手は時々, デートより仕事を優先する」 「困った時に相談しても, あまり問題が解決しない」 「相手の家族の雰囲気は自分の家族の雰囲気と違う」 「相手が自分よりかなり年上である」 「学歴や勤務先が, 自分の理想のレベルとは違う」 「気分が波がある」 「自分の話ばかりしたがる」 「家族とは別の時間や外出の自由がなくなりそうだ」 「かなり遠隔地に住むことになりそうだ」 の9項目であった。

因子の信頼性を α 係数から検討したところ, 第1因子から第3因子まではいずれも0.8以上の高い値を示した。第4因子と第5因子はやや値が低い, これらは項目数が少ないことから, 許容される値と判断した。

結婚の条件の平均値と性差および交際中の恋人の有無による違い

5つの結婚の条件の平均値(標準偏差)を比較したところ, 最も高いのは経済的リスク回避 2.69 (.74), ついで両立困難リスク回避 2.62 (.73) だった。また, 性差を検討するため t 検定を行った結果, 関係性リスク回避と経済的リスク回避で有意な性差がみられ, いずれも女性の方が高かった(それぞれ $t=2.37$ $p < .05$; $t=3.41$ $p < .001$) (Figure1)。

なお交際中の恋人の有無による有意差はみられなかった。

個人主義的家族観と結婚の条件

個人主義的家族観と結婚の条件の相関係数を算出した。その結果, 「結婚しても, 人生には結婚相手や家族とは別の自分だけの目標を持つ方がいい」と, 関係性リスク回避 ($r = .21$, $p < .01$), 経済的リスク回避 ($r = .28$, $p < .001$), 両立困難リスク回避 ($r = .23$, $p < .001$), 行動制約リスク回避 ($r = .16$, $p < .05$) との間に有意な正相関が見られた。

その他の項目との相関は有意ではなかった (Table4)。

結婚イメージ

結婚イメージを, 幸せなことと, 大変なことのどちらが多いと思うか, から尋ねたところ, 大変なことがかなり多い, やや多い, を合わせると58%であり, 幸せなことがかなり多い, やや多いを合わせた40%を上回ることから, 結婚について悲観的なイメージを持つ者の方が多い事が示された。特に, 両極である, 大変なことがかなり多いは22.9%で, 幸せなことがかなり多い8.3%を大きく上回る結果だった。男女別に見ると, 女性が, 大変なことがやや多いが, 幸せなことがやや多い, を上回るのに対し, 男性は逆の傾向が見られた (Table5)。

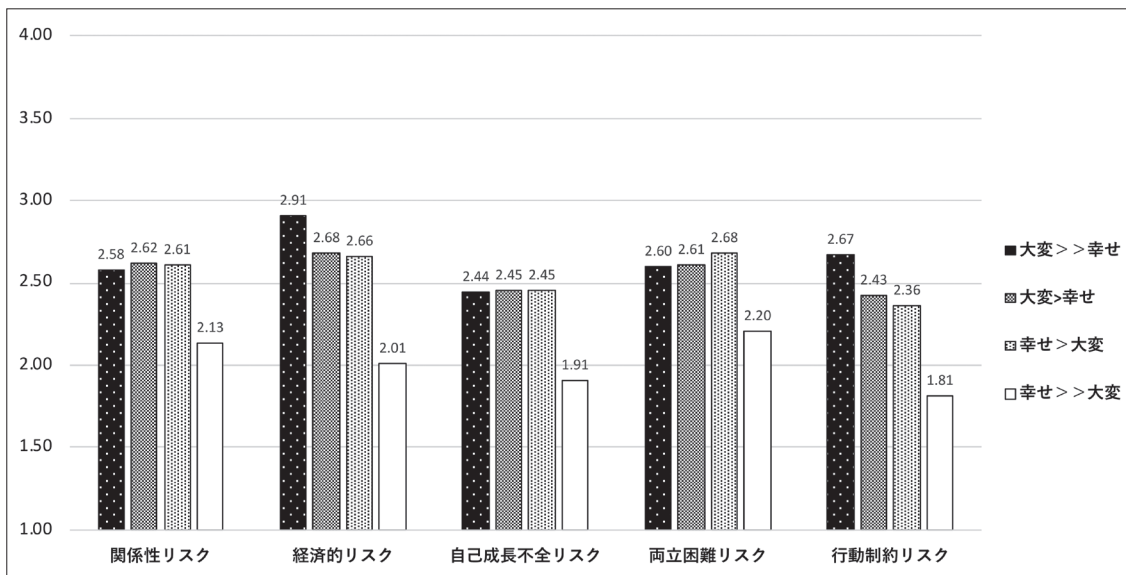


Figure2 結婚イメージによる結婚の条件の違い

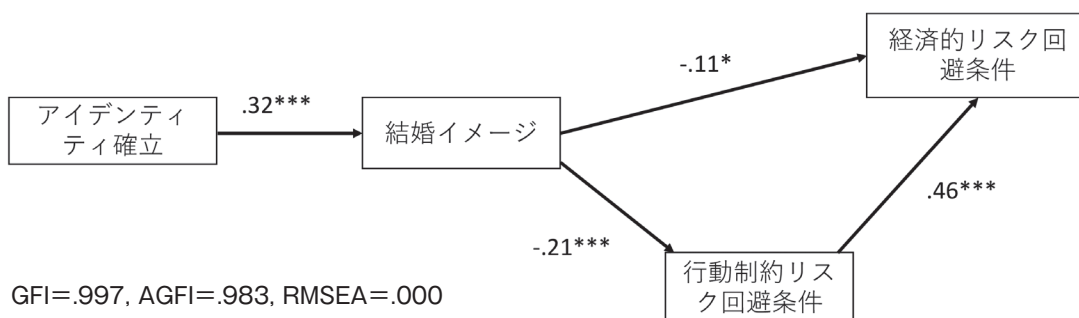


Figure3 アイデンティティおよび結婚イメージによる結婚の条件への影響最終モデル

結婚イメージによる、結婚の条件の違い

結婚イメージによって結婚の条件に違いがあるかを見るため、各条件について1要因の分散分析を行った。その結果をグラフ化したものがFigure2である。いずれの条件も、幸せのことが大変なことよりかなり多い、と考える群において低い。とりわけ、経済的リスク回避条件と行動制約リスク回避条件の差が大きい。1要因の分散分析から確認した結果、共に、大変なことが多く・大変なことがやや多い・幸せなことがやや多いイメージの群よりも、幸せなことがかなり多いイメージの群の方が有意に低かった(経済的リスク回避条件 $F(3,188) = 6.40$ $p < .001$; 行動制約回避条件 $F(3,188) = 4.60$ $p < .01$)。

結婚の条件とアイデンティティ、及び結婚イメージの関連

結婚の条件と、アイデンティティとの関連をみるために、相関係数を算出した。その結果、予想に反していずれも有意な関係はみられなかった。しかし、アイデンティティ確立と結婚イメージの間には有意な相関がみられることから ($r = .25$ $p < .001$)、アイデンティティが結婚イメージを媒介に結婚の条件に影響する可能性が示唆された。

そこで、アイデンティティ確立が結婚イメージを媒介に結婚の条件に影響するという仮説モデルを作成し、共分散構造分析により検討した。有意ではないパスを除外しながらモデルを修正した結果、Figure3に示した最終モデルが得られた。

考察

本研究では、未婚者が「結婚相手として適当」か否かを判断する、結婚の条件の構造を明らかにし、アイデンティティ発達および結婚イメージとの関連を検討した。

結婚の条件尺度の作成

結婚の条件項目について因子分析を行った結果、「関係性リスク回避」「経済的リスク回避」「自己成長不全リスク回避」「両立リスク回避」「行動制約リスク回避」の5次元に分類された。

関係性リスク回避は、その項目内容から、お互いの愛情や信頼に自信が持てないことを結婚のリスクと捉えていることがわかる。離婚率が上昇している今日、長い結婚生活の中で生じる困難を乗り越えられるか否かは、お互いの愛情が不可欠であると考えするために、そこに確信が持てないことは、結婚生活破綻のリスクと考えているのではないだろうか。経済的リスク回避の項目内容の中で注目されるのは、「意見が違う時、だいたい相手の意見で決めてしまう」という項目が、経済的リスク回避に分類された点である。お金についての考え方が違う、結婚すると自分のためのお金が持たなくなるも含めて考察すると、結婚の経済的リスクには、生活レベルの問題だけでなく、経済的主体性が失われるリスクがあると認識されているものと解釈できる。

関係性リスク回避と経済的リスク回避は女性の方が有意に高かった。夫婦間コミュニケーションの研究では、「依存・接近」「共感」という関係性を構築・維持するコミュニケーションは夫より妻の方が多いことが報告されている(平山・柏木, 2004)。女性の方が関係性リスク回避が高いという本研究の結果はこれと通底する結果であり、結婚前の段階から、結婚後の夫婦関係や家族の関係を構築・維持するのは女性という性別役割が内面化されていることによると解釈できる。女性の方が、経済的リスク回避が高かったのも同様に、結婚後の経済的決定権を持つのは夫であるという性別役割を内面化しているためであろう。つまり、夫婦間の性別役割は、男性よりも女性において、

より結婚生活の負担や主体性の喪失を連想させるものであり、回避すべきリスクと捉えられていると推察できる。

自己成長不全リスク回避の項目内容は、結婚には新しい経験や成長というプラスの価値が期待されており、それが実現されないことは、結婚による自己成長の機会喪失であると認識されていることを示している。つまり、今日の結婚は、家族を作るという親密性や世代性の課題であるだけでなく、結婚によって個としての自分をさらに成長させたいという、自己実現のための課題でもあると解釈できる。

両立困難リスク回避は、女性の方が高いと想定されたが、実際には性差がみられなかった。このことからこの因子は、家事の負担や転勤などで仕事を続けられなくなるというだけでなく、仕事や趣味も含め、やりたいことが今と同じようにはできなくなるという、結婚を自己実現の阻害リスクと捉える因子と解釈できる。

行動制約リスク回避は、現在の対人関係が維持できないことと、配偶者がいつも一緒にいたがることで個人としての行動が制約されることをリスクと捉える因子と解釈できる。伝統的な結婚観では、夫婦は二人三脚、あるいは一心同体と考えられたが、この因子は、夫婦であっても個人としての自分を持ち続けたいという家族の個人化を志向する因子と考えられる。

これらの因子を、高坂(2013)の恋愛関係の影響の因子と比較すると、「関係性リスク回避」「経済的リスク回避」「自己成長不全リスク回避」「行動制約リスク回避」は、恋愛関係の影響因子の「関係不安」と「充足的気分」、「経済的負担」、「自己拡大」、「他者交流の制限」の次元と、それぞれ対応する。一方で、相手の年齢、学歴、勤務先、容姿などについての条件は、恋愛関係の影響因子の「他者評価の上昇」と対応する項目と想定したが、結婚の条件因子としてまとまらなかった。

結婚の条件と伝統的家族観との関連では、「結婚しても結婚相手や家族とは別の自分だけの目標を持つ方がよい」という家族観が強いほど、自己拡大不全リスク回避以外の全ての結婚の条件が高くなることが明らかになった。このことは、結婚

しても個人としての自分は家族という集団とは独立の存在であると考え、家族の個人化（山田、2004）の進行が、結婚による個人の時間や経済などの個人的資源の配分の制約を回避しようとする態度を強め、それが結婚によるリスク回避のための条件を厳しくしているものと解釈できる。

結婚イメージと結婚の条件

「結婚は大変なことと幸せなことの両方があるが、どちらがより多いと思うか」という結婚イメージは、男女とも、大変なことの方がかなり多いという悲観的イメージの方が強かった。結婚イメージによる結婚の条件の違いでは、結婚イメージが楽観的な群の方が、悲観的な群よりも、結婚の条件が寛容で、特に経済的リスク回避と行動の制約回避ではそれが顕著であることが明らかになった。

夫婦の関係性や結婚生活による自己成長、さらには個人としての生活と結婚の両立は、自分の努力でそのリスクを回避できる可能性が高い。一方、経済的リスクや行動の主体性が制約されるリスクは、結婚後の自分の生き方そのものの制約につながるだけでなく、自分の側の努力では回避できない可能性が高い。結婚イメージの「結婚は幸せなことより大変なことが多い」の具体的内容については問うていないが、これらの条件との相関が有意だったことから、経済的制約やお金の使い方を含めた行動の制約を、結婚の悲観的側面と考え、それらのリスクを回避するには、結婚相手を選ぶ時点での条件が重要と考えているものと解釈できる。

結婚の条件とアイデンティティおよび結婚イメージ

アイデンティティと結婚イメージが結婚の条件に影響を与える仮説モデルについて、共分散構造分析から検討した結果、結婚の条件のうち、経済的リスク回避と行動制約回避は、結婚イメージを媒介にアイデンティティ確立と関連し、アイデンティティ確立が進むほど結婚イメージが楽観的になり、それが結婚の条件を寛容にするというモデルが支持された。

アイデンティティ確立は青年期の発達課題であるものの、青年期が延長している今日（乾、

2016）、アイデンティティが確立される時期は多様化しているのではないだろうか。男女問わず、望まない非正規就労や転職を繰り返すケースでは、自分を社会にどう根付かせるかというアイデンティティ確立が未達成であると推察される。成人期においても個としてのアイデンティティが未確立の場合、その課題の積み残しは、結婚という成人期の課題と平行して模索されるものとなる。個としてのアイデンティティ確立には、確立に至るまでの試行錯誤のために、経済的自由や行動の自由が必要になる。そのため、アイデンティティが未確立である場合ほど、結婚は行動制約リスクや経済的自由が制約されるリスクが生じる大変なものという悲観的イメージが強まり、そのリスクを回避できる条件が重視されることになるものと解釈できる。

一方、アイデンティティと結婚の条件との直接的な関係は有意ではなかった。女性の高学歴化が進み、男性と対等に責任ある仕事に就く女性が増えている。このような女性においてはアイデンティティ確立が達成されていると考えられるが、その場合には、その責任を遂行できなくなるリスクを回避するための条件が重視されるであろう。そのため、アイデンティティとの直接的関係ではなく、結婚のイメージが媒介となっているものと思われる。

まとめと今後の課題

適当な相手とめぐりあえない、という未婚理由について、本研究では結婚の条件から検討を行った。結婚は個としての自分と家族としての自分をどう折り合わせるかという、個と関係性の問題である。そのため、個人主義的な価値観が強くなるほど、家族とは別の個としての自分のための時間や経済が重要になり、結婚をそれが失われるリスクと捉える傾向が強くなるものと考えられる。男性は非正規就業の場合に結婚する割合が低く、女性は正規就業の場合に結婚する割合が低い（男女共同参画局、2014）ことが指摘されている。男性非正規就業の場合には結婚資金がないという現実的理由以外にも、アイデンティティが未確立でそ

の確立のための時間や経済的自由を家族形成よりも優先したい、という心理的要因があるのではないだろうか。アイデンティティが未確立な場合には、結婚イメージを介して間接的に結婚の条件が厳しくなり、適当な相手とめぐりあうことがより困難になると考えられる。一方女性の正規就業の場合は、個としてのアイデンティティが確立されている一方で、結婚後の性別分業という非個人主義的価値観も未だ根強いために、その葛藤が悲観的結婚イメージを高め、結婚の条件が厳しくなるものと考えられる。

本研究はサンプル数が197名と少なく、男女比に偏りがあるため、分析結果や解釈には限界がある。回答者の性別については、分析可能なサンプル数を得ることが困難なため今回は性自認が男性と女性のみを研究対象としている。また、結婚の条件項目についても、「他者評価の上昇」と対応する因子が形成されなかったことから、さらに項目の追加が必要なのかもしれない。今後さらにサンプルを増やし、結婚の条件尺度の精緻化を行う必要があると思われる。

引用文献

- Braaten, E., & Rosen, L. (1998). Development and Validation of the Marital Attitude Scale. *Journal of Divorce & Remarriage*, 29, 83-92.
- Erikson, E. H. (2011). アイデンティティとライフサイクル (西平直・中島由恵, 訳). 誠心書房.
(Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. (Psychological Issues Vol. 1. Monograph 1.) New York: international university Press.)
- 男女共同参画局 (2014) 男女共同参画白書平成 26 年版 https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/gaiyou/html/honpen/b1_s00_01.html(2021 年 9 月 21 日).
- 平山順子・柏木恵子 (2004). 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連 発達心理学研究, 15, 89-100.
- 乾 彰夫 (2016). 学校から仕事への移行期間延長と青年期研究の課題 発達心理学研究, 27, 335-345.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2016) 第 15 回出生動向基本調査 http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report5.pdf(2021 年 9 月 21 日).
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2019). 第 6 回全国家庭動向調査結果の概要 http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Kohyo/NSFJ6_gaiyo.pdf (2021 年 9 月 21 日).
- 高坂雅康 (2011). '恋人を欲しいと思わない青年'の心理的特徴の検討 青年心理学研究, 23, 143-158.
- 高坂雅康 (2013). 大学生におけるアイデンティティと恋愛関係との因果関係の推定発達心理学研究, 24, 33-41.
- 高坂雅康 (2016). 恋愛心理学特論—恋愛する青年/しない青年の読み解き方— 東京：福村出版
- 厚生労働省 (2015). 平成 27 年版厚生労働白書—人口減少社会を考える— <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/backdata/01-01-04-004.html> (2021 年 9 月 21 日)
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 内閣府 (2014). 平成 26 年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書 (全体版) <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/index.html> (9 月 24 日)
- 小倉千賀子 (2003). 結婚の条件 東京：朝日新聞社
- 大野 久 (2010). 青年期の恋愛の発達 大野 久 (編) シリーズ生涯発達心理学 4 エピソードでつかむ青年心理学 (pp77-105) 京都：ミネルヴァ書房
- Park, S.S., & Rosen, L. A. (2013). The Marital Scales: Measurement of intent, attitudes, and aspects regarding marital relationships. *Journal of Divorce & Remarriage*, 54, 295-312.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 —アイデンティティの発達との関連で— 日本教育心理学研究, 40, 121-129.
- 谷口淳一 (2013). 恋愛しない・できない若者たち 大坊郁夫・谷口泰富 (編) 現代社会と応用心理学 2 クローズアップ恋愛 (pp.82-91). 東京：福村出版
- 山田昌弘 (2004). 家族の個人化 社会学評論, 54(4), 341-354.

謝辞

この研究は、JSPS 科研費 JP18k03045 の助成を受けて行われたものです。

（2021.9.28 受稿，2021.11.8 受理）